

第2回 東静岡駅南口県有地への「文化力の拠点」基本計画策定専門家会議 会議録

日 時	平成27年12月25日（金） 午後4時から 午後6時まで
場 所	静岡県庁別館9階第1特別会議室
出席者職・氏名	◎伊藤 滋 東京大学名誉教授、早稲田大学特任教授 内藤 廣 建築家・東京大学名誉教授 寒竹伸一 静岡文化芸術大学大学院教授 石原和幸 (株)石原和幸デザイン研究所代表取締役 東 惠子 東海大学海洋学部教授 伊東幸宏 ふじのくに地域・大学コンソーシアム理事長、 静岡大学学長 荒木信幸 ふじのくに地域・大学コンソーシアム企画運営委員会副 委員長、静岡理工科大学名誉学長 石塚正孝 静岡県コンベンション・アーツセンター館長 酒井公夫 (公財)静岡観光コンベンション協会理事長 藤田圭亮 (株)なすび代表取締役社長 難波副知事他
議題	・「文化力の拠点」への導入機能・規模イメージ案（たたき台）について ・「文化力の拠点」活用案の提案 ～大学コンソーシアムの拠点機能形成の観点から～
配付資料	資料1：第1回専門家会議（平成27年8月24日開催）における委員からの意見への対応 資料2：「文化力の拠点」導入機能、規模イメージ案（たたき台） 資料3：「文化力の拠点」活用案 ～大学コンソーシアムの拠点機能形成の観点から～

【白井企画広報部長】 それでは、委員の皆様全員おそろいでございますので、ただ今から第2回東静岡駅南口県有地への「文化力の拠点」基本計画策定専門家会議を開催いたします。

委員の皆様には年末のお忙しい中を御出席いただきまして、誠にありがとうございます。

本日の会議でございますが、知事は公務により欠席しておりますので、開会に当たり、難波副知事から御挨拶を申し上げます。

【難波副知事】 副知事の難波でございます。どうぞよろしく願いいたします。

本日は、年末の大変お忙しい中、伊藤滋先生をはじめ、委員の皆様全員に御出席をいただきまして、本当にありがとうございます。

2回目ですので、本会議の目的等につきましては省略しますが、去る8月24日に第1回目の会議を開催しまして、委員の皆様から、「文化力の拠点」の整備イメージ、そして導入機能、さらには東静岡地区の景観・まちづくりについて御意見をちょうだいしたところ

であります。今日の会議では、前回の会議でいただきました御意見への対応について御報告させていただきますとともに、「文化力の拠点」施設への導入機能や規模について、委員の皆様にご審議いただきたいと考えています。前回の会議と同様に、事務局からたたき台を提示させていただきますが、荒木委員から、大学コンソーシアムの拠点機能形成の観点から、活用案も御提案をいただきまして、議論を深めてまいりたいと考えています。

活発な御議論をどうぞよろしく願いいたします。ありがとうございました。

【白井企画広報部長】　　続きまして、本専門家会議の伊藤会長から、御挨拶をお願いいたします。

【伊藤会長】　　どうも、お集まりいただきありがとうございます。

1回目は、皆様から、多方面からの御意見を色々伺いまして、実は私の頭は、イメージが拡散しております。ただ、最終的には、建築空間的なものをつくらなければいけないでしょう。

ですから、その方向へ向かって、皆さん、あまり建築と言わないでも、なるべく立体的なイメージで、そろそろお話をいただければ、ある方向性が決まってくるのではないかと考えております。それでは、始めましょう。どうぞよろしく。

【白井企画広報部長】　　ありがとうございました。

本日の出席者でございますが、お手元に配付しております委員名簿と座席表のとおりでございます。本日は、委員の皆様全員御出席をいただいておりますことを御報告いたします。また、県側の出席者につきましても、座席表のとおりでございます。

それでは、お手元の次第に基づき、議事に入らせていただきます。ここからの議事進行は伊藤会長をお願いいたします。

【伊藤会長】　　それでは、企画広報部長から、御説明をお願いいたします。

【白井企画広報部長】　　それでは、私の方から説明をいたします。

まず、お手元の資料1をご覧ください。「第1回専門家会議(平成27年8月24日開催)における委員からの意見への対応」でございます。

委員の皆様から、左側のナンバーのとおり、21項目にわたる貴重な御意見をいただきました。この21にわたる御意見を、3つのカテゴリーに分けました。まずは、「文化力の拠点」の整備イメージに関する意見、それから「文化力の拠点」への導入機能に関する意見、さらには景観・まちづくりに関する意見の3つのカテゴリーでございます。

初めに、1つ目の「文化力の拠点」の整備イメージに関する意見についてであります。

意見の1から4に記載のとおり、駅と接続する3階のメインエントランスと南側の道路との接続に工夫が必要、南側の道路に壁面が連続することがないように留意すること、「文化力の拠点」とグランシップ芝生広場との連続性についても議論を深めるべきとの御意見をいただきました。今後、「文化力の拠点」と周辺施設との連続性の確保に配慮するとともに、南側に暗い壁が並ぶことがないように、施設や機能の配置に留意しながら基本計画の策定を進めてまいります。

次に、「文化力の拠点」への導入機能に関する意見についてでございます。

意見の5及び6に記載のとおり、「文化力の拠点」の来訪者の見込み数や駐車場の必要台数の明確化、グランシップの駐車場機能の確保が必要との御意見をいただきました。今後検討されます導入機能を踏まえまして、来訪者数や駐車場台数について調査・推計し、御報告申し上げます。なお、グランシップの必要駐車台数の確保にも留意してまいります。

また、意見7に記載のとおり、誰が何に使うための施設かの明確化が必要との御意見をいただきました。御意見を踏まえて、導入機能、規模イメージの事務局案を作成しております。後ほど御説明し、本日御審議をいただきたいと考えておりますので、よろしく願い申し上げます。

さらに、意見8に記載の、多文化共生、多世代交流など、新たなコミュニティを形成することにより社会や都市空間を共有する仕組みづくりが重要との御意見につきましては、若者や外国人をはじめ、多世代の様々な人々が交流し、新たなコミュニティの形成を促進する仕組みづくりを検討してまいります。

意見9及び10に記載の、静岡市内の飲食業は空き店舗が目立つ現状を踏まえ、「食」の機能の導入については慎重な検討が必要などの御意見につきましては、今後、市場動向調査を実施してまいります。

意見11から13に記載の、本県の特徴を踏まえた大学コンソーシアム機能の検討が必要などの御意見につきましては、本日、荒木委員から、大学コンソーシアムの拠点機能形成の観点から、「文化力の拠点」の活用案を御提案いただき、御審議いただくこととしておりますので、よろしくお願いいたします。

意見14に記載の、庭園の美しい景色を強く打ち出すことが重要であるとの御意見につきましては、施設の内外に本県の多彩な花を飾るなど、花と緑があふれる、「ふじのくに『花の都』しずおか」を発信してまいります。

意見15に記載の、移動手段のステーション機能についても議論すべきとの御意見につ

きましては、導入機能等の検討を踏まえた上で、移動手段につきましても、今後、御審議をいただきたいと考えております。

なお、3つ目の最後のカテゴリでございますが、景観・まちづくりに関する意見への対応につきましては、交通基盤部長の方から御説明を申し上げます。

【野知交通基盤部長】 交通基盤部長の野知でございます。よろしく願いいたします。

それでは、景観・まちづくりに関する意見につきましては、街路や看板・電柱などの周辺景観を整えることを考えるべき、粗悪な景観に対する景観誘導、指導、助言型の体制づくりによる景観改善の実現化が急務である、また富士山の眺望景観を確保するための眺望規制の導入、都市の緑化による森づくり、まちづくりのとり入れなどのご意見をいただきました。

資料1-1をごらんください。

県及び静岡市は、本日ご臨席をいただいております寒竹先生、また内藤先生、東先生をアドバイザーにお迎えいたしまして、東静岡地区におけます都市景観検討技術会議を設置いたしました。第1回技術会議を11月2日に行いまして、会議のあり方やスケジュールなどを確認いたしまして、引き続き東静岡駅周辺地区におけます個々の既存建築物の外壁等の色彩の使用状況、建築物の高さ、容積率などの調査を行いますとともに、富士山の眺望ポイントの把握を行っておるところでございます。

今後、会議を重ねまして、来年の3月の本専門家会議には、この地区におけます街路空間を中心とした目指す方向性とともに、景観法におけます規制・誘導策の導入や公共事業等によります緑化の推進など、実現手法の素案をご報告させていただき予定でございます。その後、フォトモンタージュなどを活用いたしまして景観形成のイメージを描くことといたしておりまして、最終的には東静岡地区景観ガイドライン（案）を取りまとめまして、本専門家会議にもご報告させていただき予定でございます。

ガイドライン（案）では、本地区におけます美しく風格のある都市景観の方向性を示し、本専門家会議でご審議いただいております「文化力の拠点」の基本計画にも反映していくとともに、今後の静岡市におけます景観法あるいは都市計画法、屋外広告物法等に基づきます規制・誘導等の実践に結びつくような検討を進めてまいりたいと考えております。

以上でございます。

【伊藤会長】 ありがとうございました。

それでは、「文化力の拠点」への導入機能イメージについて、企画広報部長から御説明い

ただけますか。

【白井企画広報部長】 それでは、お手元の資料2をご覧ください。

この資料は、本日たたき台として御用意したものです。これは昨年度末に取りまとめた「“ふじのくに”の『文化力』を活かした地域づくり基本構想」をまとめる際に、「文化力の拠点」に入れるべきコンセプトとして3つ掲げてございます。1つは「創造・発信」、2つ目は「学ぶ・人づくり」、3つ目は「出会い・交わる」でございます。この3つのコンセプトごとに、「文化力の拠点」に導入が想定される施設・設備、規模感、コンテンツ等のイメージを今回の専門家会議で御審議いただくためのたたき台として取りまとめたものでございます。

導入機能につきましては、基本構想に例示される機能のうち、「文化力の拠点」の中で特に必要と考えられる機能に絞り込んでございます。また、規模感につきましても、類似施設から参考値を算出した規模感を、イメージとして御提示するものでございます。今後の議論を踏まえまして、具体的に導入する機能や規模等については精査を進めてまいりたいと考えておりますので、御審議、また、さらにさまざまな導入機能についての御意見等をいただければと思います。

それでは、資料の説明をいたします。

初めに、コンセプトの1、「創造・発信」のうち、上段にあります「個性ある文化を創造し、発信することで、本県の「文化力」の高さをより一層磨き高め、国内外に向けて「文化力」の高さを発信する拠点機能」についてでございます。

「“ふじのくに”の『文化力』を発信する機能」につきましては、世界水準の魅力を育んできた本県の「文化力」の高さを国内外の人々に向けて発信する、この施設の重要な機能でございます。国内外からの来訪者に対しまして、本県が誇る多彩な魅力を発信する機能として、世界遺産富士山、韮山反射炉、南アルプスエコパーク、伊豆半島ジオパークなど、本県の誇る世界水準の魅力をはじめ、県立美術館や地球環境史ミュージアム、地域に根差した民俗文化や人々を引きつける観光資源など、本県が有する魅力を映像等により発信します多目的情報発信スペースをイメージしてございます。

次の段で、「日本一を誇る恵みの豊かさ、世界水準の文化や自然の美しさを実感できる機能」のうち、「『食・茶・花の都』の創造・発信機能」についてでございます。

「食の都」につきましては、民間による提案を期待する施設として、多彩で高品質な県産食材を生かした食の都仕事人等の料理を楽しめるレストラン、あるいは、B級グルメな

ど地域ならではの料理を楽しく味わえる食堂、さらには食材の王国を代表する厳選された農林水産物の販売施設など、本県の豊富な食材を楽しむことのできる場をイメージしてございます。

次に、「茶の都」につきましては、これも民間による提案を期待する施設でございますが、本県の銘柄茶とお菓子を楽しむことができる緑茶カフェなど、お茶を楽しみ、満喫することができる場をイメージしてございます。

3つ目の「花の都」につきましては、この「文化力の拠点」施設の内外を本県の多彩な花で装飾するなど、花と緑があふれる「ふじのくに『花の都』しずおか」を発信していくことをイメージしております。

次に、2つ目のコンセプト、「学ぶ・人づくり」のうち、上段の「次代の静岡を担う学生をはじめとした若者が集い、郷土愛を持って、地域に根差した活動や、静岡ならではの学びができる機能」につきましては、「大学コンソーシアムの拠点機能」の形成の観点から、後ほど、荒木委員から活用案の御提案をいただきます。

次の欄、中段の「世代を超えて集い、生涯を通して、学び、楽しみ、自らを高めることのできる機能」につきましては、「図書室機能」として、学生をはじめ、一般利用者が本県の「文化力」の高さに関する書籍や、歴史的資料等を閲覧・学習できる、県民の生涯学習のニーズに応える図書室と学習スペース、さらには歴史文化情報センターなどをイメージしております。

次に、下段の「歴史の観点から静岡を学べる機能」につきましては、「歴史資産を展示する機能」として、古代東海道の遺構の歴史的価値を体感しながら学べる展示スペースをイメージしております。

続きまして、2枚目をご覧ください。

3つ目のコンセプトでございます「出会い・交わる」のうち、上段の「東静岡から日本平、三保松原に広がる地域の玄関口にふさわしい交流の核となる機能」につきましては、「迎賓機能」として、海外からの賓客等をお迎えし、最上階で富士山の眺望を楽しみながら会談等を行うことができる特別応接室や特別会議室をイメージしております。このほか、民間提案を期待する機能として、宿泊施設や展望ルーム、レストランなどを想定しております。

次に、中段の「留学生支援により海外との多彩な出会い・交流を生み出すとともに、産業面からも海外とのつながりを深める機能」につきましては、「留学生や県外学生の支援機

能」として、後ほど荒木委員からの御提案がございます。

また、「海外ビジネスパーソンの招致や国際交流を促進する機能」として、外資系企業の誘致のためのレンタルオフィスや、海外ビジネスインターン向けの宿泊施設をイメージしてございます。

このほか、下段に「その他」として記載のとおり、その他、民間による提案を期待する施設・設備といたしまして、本県ならではの文化・学びに根差した民間の業務・研究オフィスや、県内のクリエイターやデザイナーの活動の場となるアトリエやスタジオ、県民の生涯学習や若者の出会い等に資する多目的ホールなどを想定しております。

また、「共用機能」といたしまして、施設の全体の15%から40%程度の共用部分が必要となること、「駐車機能」につきましては、既存のグランシップの駐車場の面積に加え、「文化力の拠点」の導入機能・規模に応じた駐車台数の確保が必要になるものと想定してございます。

なお、冒頭にも御説明申し上げましたように、欄外に記載のとおり、当資料は、本日の御審議を深められますよう、導入機能につきましては、基本構想に例示される機能のうち、「文化力の拠点」に特に必要と考えられる機能に絞り込み、類似施設からの参考値を算出した規模感をイメージとして御提示したものでございます。本日の御審議を踏まえまして、次回以降も御議論いただきながら、具体的に導入する機能や規模等の精査を進めてまいりたいと考えておりますので、よろしく願いいたします。

また、宿泊施設や飲食施設、物販施設、オフィス等の民間提案を期待する機能につきましては、第1回会議におけます委員からの御指摘も踏まえ、今後、市場動向の調査を実施した上で、導入の可能性についてしっかりと検討を加えてまいりたいと考えています。

「文化力の拠点」の導入機能、規模イメージ（案）につきましてはの説明は以上でございます。よろしく御審議のほど、お願いいたします。

【伊藤会長】 分かりました。

それでは、「文化力の拠点」の活用案について、荒木委員の方から御説明をお願いしたいと思います。

【荒木委員】 荒木でございます。

大学コンソーシアムの機能という観点で御説明申し上げたいと思っておりますが、大学コンソーシアムがどういうものか、まだご存じない方がおられると思い、急遽、先ほどパンフレットの配付をお願いしました。よろしく願いしたいと思います。

静岡県内の大学というのは、この前お話し申し上げたように、東から西まで距離の長い地域に点在しております。大学だけでなく、地方自治体、さらには企業、あるいはそれに関連する色々な団体が集い合って、コンソーシアムを昨年度の4月につくりました。その拠点形成についてお話し申し上げるということでございます。

この件については、もちろん組織ができたばかりでございますが、企画運営委員会というものがありますし、さらに理事会というものがあります。その理事会の責任者は、ここにおられる伊東学長でございますし、それから私は企画運営委員会の副委員長という立場でございます。ただ、そういう立場でこれを御提案申し上げるわけではございません。もちろん企画運営委員会とか理事会でコンソーシアムのあり方をどうすべきかということを議論してまいりましたし、まさしく「文化力の拠点」という案が、今、浮上している。それについて、我々委員会としても審議してきたところでございますが、これからお示しする案は、あくまでもこの専門家会議の委員として、伊東委員と私とでまとめたものでございます。ですから、決定したものではないということをお認めいただきたいと思っております。

前置きが長くなりましたが、今配った資料ではなく、もともとある資料3をご覧くださいければと思います。

提案の視点というところは、「ふじのくに地域・大学コンソーシアム」についての認識をそのパンフレットでいただいたということにいたしまして、静岡県の特性として、熱海から浜松まで東西に非常に細長い県であるということで、その中に大学が点在しているという状況については前回も申し上げました。そうすると、こういう大学コンソーシアムがお互いに連携しながら活動するといったときには拠点が必要です。その拠点としては、この細長い県の中で、理想を言えば、東・中・西それぞれのところに1カ所ずつということになると思いますが、もちろんそれはできておりません。まずは、長い静岡県の真ん中にある静岡市辺りにその活動拠点が必要ではないかということが骨子です。

では、その機能はどうあるべきかということについて御提案申し上げるわけですが、この地域は、まさしく教育機関、さらに文化施設が集中しているところでございます。したがって、大学コンソーシアムというのは、まさに、この静岡県全体の文化力の向上のための牽引力にならなくてはならないと我々は思っております。ですから、集中している東静岡地域は、大学コンソーシアムの拠点でもあるべきだと。もちろん、全部ではなくて、「文化力の拠点」ということは、同時に大学コンソーシアムの拠点であると位置付けたいと考えております。

では、具体的に、必要な機能はどうあるべきかということについては、いろいろな観点で検討してまいりましたが、やはり地理的な制限とかがありますので、そのところで少し制限されたことを申し上げたいと思っています。それが、この資料3の中段から少し太字で書いてあるところでございます。

そのための必要な機能はどういうものかということですが、点在している大学がそれぞれの教育の責任を負うということは当然のことでございますが、今まで議論されてきましたように、地域に存在感のある大学になるためには、できるだけ良い人材を輩出して、大学が向上し、静岡県から大都市に流れ出る人口をできるだけ止めないといけないことでございます。そのためには、大学に任せるのではなくて、地域と一緒にあって、いわゆる改革も含めて進めていく必要があると考えております。

大学同士がどう切磋琢磨するのかということにつきましては、色々なやり方があるかと思えます。ここに書いたのは、その例示でございます。

これまでもやってきたところがございますが、1番に「ICTを活用した教育研究機能」と書いてあります。要は、真ん中辺に細く書いてございます共同授業とか公開授業、これは京都のコンソーシアムも開催してございますが、特に静岡県のような地域においては、静岡県内の自然現象とか富士山を中心とした富士山学とか、そういうことの認識を皆さんで共有して、大学に入ってきた学生諸君も、もちろんそれを知る。知るだけではなくて、どうすればいいか考えていくということが必要かと思っています。そういうことを共同授業や公開授業で一緒に行っていくことも必要であろうと思えます。

ただ、その時に東静岡にみんな集まってくるか？ それはなかなかできないわけです。そこで、そこに書いてあるようなICT、インフォメーション・コミュニケーション・テクノロジーという手法を使うということですが、最近ではあまりICTとかITと言わずに、SNSといいますか、若者はほとんどiPad、iPhoneで色々な情報を交換しています。今の時点では、それを教育手法に使う、ツールとして使おうという方向がだんだん出ております。これは若者に結構受けています。

我々がパソコンで授業をするなどというと、普通の黒板に向かって講義するよりも、はるかに省略したといいますか、簡単な方法だと思われがちですが、決してそうではなくて、自ら学ぼうとする意欲を学生に持たせるためには、一人一人を先生、教員がどう把握するかということです。私の大学はあまり大きくありませんが、そういうものにe-learning方式、SIST、i-learnという名前をつけています。英語の教育でも、数学の

教育でも、授業の前に宿題を出します。学生が本当にそれに向かったか向かわないかというものの解答を出させます。これをインターネットで収集してしまうわけです。この学生は5分間やったぞ、この学生は30分やったぞということが一目瞭然に分かってしまう。そういうことをやりますと、これまで下宿に帰ったら勉強しなかった学生が勉強するようになる。これは、最近の若者の志向にのった教育手法ではないかと思います。

また、「アクティブラーニング」という言葉が一番最後のポツのところに書いてありますが、いわゆる逆転とか反転授業などという言葉でも言っています。黒板に向かって授業をやるということが大学の講義ではないぞ、まず、考えさせることだと。そのためには、授業が始まる前に、ある程度課題あるいは学生が興味を持つようなことを提示して、それに対してディスカッションさせる。ですから、ディスカッションありきが最初の授業だと。これを逆転、反転という言い方もしているわけです。そういう手法ですと、教室に集まらなくても、かなりできる。ただし、それだけだと済みませんので、やはり長い講義の中で一、二度、最初と真ん中辺と最後ぐらいは集まる。そういう機会、お互いに本当に面と向かってコミュニケーションをとる機会も必要だろうと。そのためには、やはり拠点が必要であろうと。もちろん、SNSで使うような施設も必要です。放送局に相当するかと思います。それが東静岡にあるべきだということでございます。そういうことを各大学が一緒に行う。そういうことにまだ疎い大学も一緒に教育改革をしていく、いわゆるアクティブラーニングを推進していくことになっていくのではないかと考えている次第でございます。

ポツが4つ書いてあるわけですが、そのうちの最後が、大学教員あるいは事務職員のFDとSD、職員に対してはSDと書いていますし、教員に対してはFD、ファカルティディベロップメントという言葉ですが、教員同士の自己研さんを促進するのではないかと考えている次第でございます。

実は、Wi-Fiにも代表されるように、地域でインターネット、SNSの放送局をたくさんつくろうとしています。しかも、無料でできるという状況が生まれつつありますので、そのことによって、2番目に書いてある「大学と地域の連携機能」が生まれます。そういう活動を通じて、大学がその地域において親しみやすく、さらには存在感が生まれるのではないかと考えている次第です。それが文科省の言うCOC機能だと。静岡大学も、それから県立大学も、今、COC機能を一部担っておりますが、そんな形のもので全体で共有できるのではないかと考えています。

SNSとかICTを使ってということに対しては、やはり一度、二度は顔を合わせるこ

とによって、さらに意欲が湧くということの機会も絶対必要だという意味で、3番目に書いてある「学生や研究者等の交流機能」もそこに具備すべきだということが必須だと思っています。このことをいかに活用するかということが、その地域の活性化にもつながっていくだろうと思っています。これは、今、授業だけではなくて、研究拠点を形成するという意味でも非常に有効であろうと思っています。

それから、最後の4番目に書いてございますのは、先ほどの資料2でいいますと、「出会い・交わる」の中で留学生に対する提案ということでございますけれども、川勝知事が、例えばモンゴルから100名の留学生を受け入れたいと御提案いただいていることと関連します。現時点では、残念ながら、静岡県内の留学生の受け入れ状況は、例えば大都市から比べたら非常に割合も少ないし、人数も少ない状況が現実です。しかも、前回申し上げましたが、例えば私の大学のような小規模大学ですと、留学生自身も非常に数が少なく、先ほどのような富士山学、あるいは日本はどういう国かということ学ぶ機会、学ぶ環境が非常に薄いわけです。そういう教育を全体で担い合うということは、留学生が日本あるいは静岡県に来るきっかけにもなるだろうと思っています。

ただ、この点で川勝知事とまだ十分に話を伺っておりませんが、モンゴルから100名といったときに、どういう形でというのは、大学が受け入れるのか、あるいは事前の日本語教育のために仮受け入れするのかとか、色々なことがございます。ただ、本格的に大学が受け入れるのを肩代わりすることはできない。ですから、非常に短期滞在ということになり得る。そうすると、東静岡にそういう拠点があるということは非常に有効ではないかと、全体的に留学生が多くなるきっかけになるのではないかと考えています。漠然とした今の話は非常に抽象的で、具体的でないところがございますが、そのことは、多分具体的なものと結びつきやすい方法ではないかと考えている次第です。

4番目の、先ほどの留学生に対してどうするかということは、いろいろな考え方がございますので、その点については、また議論を深めていただければ大変ありがたいと思っています。

以上でございます。

【伊藤会長】 ありがとうございます。以上、具体的な提案がございましたが、これから、皆さん、広く意見を交じ合わせながら方向性が出てくればと思っております。

繰り返しますが、静岡県の東静岡駅の南口に「文化力の拠点」をつくらうということでございます。それについてのもう少し具体的なイメージを、この議論からつくり上げてい

ければ良いと思っております。どうぞ、御自由に御発言していただきたいと思いますが、話題提供で、ちょっと変な話ですが、僕から事務局に御質問してよろしいでしょうか。

資料2は相当具体的ですが、「創造・発信」で「食の都」、「茶の都」、「花の都」とありますが、これは民間企業がやることですか。例えば、レストランをつくるとか、花屋をつくるとか、お茶を売るとか、みんな商売ですよ。こういうものも、この「文化力の拠点」の中へ入れ込むということですか。これは役人がやったって全然意味をなさないですよ。

【白井企画広報部長】 静岡県は、日本一の食材を誇っております。農林水産物で439品目の食材がございます。まさに、「食の都」であると捉えて、その食材を生かして食の料理人等を育てているというのが1つございます。それからまた、お茶は全国一の生産量、消費量ということでございますので、これにつきましても、まさに「茶の都」でございます。これにつきましては、にぎわいの中で食やお茶を飲むことを楽しんでいただけることが東静岡には必要かなと思います。

もちろん、県として「茶の都」の魅力を発信していく拠点というのは、別途、東静岡ではなく、まさにお茶どころの牧之原台地の上とか、そういうところに整備がございますので、その情報を発信しつつ、魅力を味わっていただけるようなところをこの施設の中に整備をしていきたいと考えておりますことから、ここについては、ぜひ民間活力の導入といたしますか、民間による提案を期待しているところでございます。食につきましても、同様でございます。

【伊藤会長】 お花はいかがですか。静岡県と花の結びつきはどういう点ですか。

【白井企画広報部長】 「花の都」につきましては、花につきましても704品目ございます。非常に花卉栽培の豊富なおところございまして、「花の都」と称しております。ここにつきましては、この建物の周りを花と緑で飾りたいと。それが「花の都」の発信につながると位置付けているところでございます。

これにつきましては、施設に附帯した外構というか、施設整備ということで考えているところでございます。

【伊藤会長】 大体分かりました。

それから、これは皆様の御質問を期待しながらの一種のやらせですけれども、1番目の「個性ある文化を創造し、発信」、「多目的情報発信スペース」は、一言で言うと映画館をつくるということですか。そうでもないですか。

【白井企画広報部長】 映画館というか、映像、スクリーンで視覚に訴えるというところ

ろをイメージしているところでございます。

【伊藤会長】 何か思い切った工夫がありますか。これはどこにでもありますよね。視覚に訴えてパノラミックに見せて3Dでわっとやるような感じで、すごいなんていうところですが、ここはそれだけではないんでしょう。

【白井企画広報部長】 設備、装置としては、会長がおっしゃるようなイメージです。要は、そこで流す中身といいですか、コンテンツは、静岡県の「文化力」の高さを発信できるようなもの、先ほど言いました世界水準でいいますと、世界遺産の富士山をはじめ、多種多様な世界水準の魅力がございますので、そういうものを育ててきた静岡県の「文化力」の高さを発信できるようなソフトを常時放映をしていきたいと考えています。

【伊藤会長】 それをつくるのは物すごく重要ですね。これを外注したら、つまらないですよ。そういうことでないでしょう。

【白井企画広報部長】 作成自体は民間の力を使わないと難しいかもしれませんが、その監修に当たっては、県がしっかりと関与をしてつくっていくということになります。

【伊藤会長】 何となく分かってきました。

どうぞ。気楽にお伺いするには、内藤先生、何かないですか。その辺から始めましょう。寒竹先生もひとつよろしくどうぞ。

【内藤委員】 感想ですけれども、伊藤先生が言われるように、結構よくある話かなと思って聞いていたので、よほど何か独自の取組をしないと難しいという気がしました。「文化力」と言うが、これは結構大問題で、相当ハードルが高いことを言われているので、施設、ハコモノをつくったから、これがにじみ出てくるかという、まだこの企画書だとかなかなか難しいという気がしました。

以上でございます。

【伊藤会長】 寒竹先生、どうぞ。

【寒竹委員】 内藤先生と同じような感想ですが、文化というのは風土から出てくるものですよ。静岡県の風土というか、気候というものが絡んで答えが出てきていないように感じる。抽象的に、ただ「食」が出てきている。こちらに来て、私が思うのは、「食」だったら、この場所で食べるんだから、「食」が一番おいしいのは鮮度ですよ。魚でも果物でも色々なものの採れたてが一番おいしい。この場は動かないんだから、「食」だったら、東京にいたって、いっぱい搬送されればどこでも食べられる。場所と「食」とか、気候、静岡は気候も売りですよ。その気候があるから、こういう「食」が出て、文化が出たと

いう、その辺をしっかりとつかまえると、特徴のある場所がつくれていくのではないか。

といった場合に、例えば図書室なんて決めつけてしまうと普通になってしまうわけです。昔の図書空間、古代、図書空間などというのは、真ん中に広場があって、そこを歩きながら知の交換をするとか、そういうところですよ。資料2に色々書いてあるものを、都会ではビルで建てていかななくてはいけないから、みんなぶつ切りに分けないといけないけれども、逆に、静岡のこの場所は、それが連続している空間を提示してもらおう。

それはなぜかといったら、見てみると、あまり面積がないですよ。あの広い中に、この考え方は……。ちょっと長くなって。この辺でやめておきますか。

【伊藤会長】 いや、どうぞ、続けてください。割合まだ抽象的段階ですので、どうぞ。

【寒竹委員】 最大容積率はどれくらいあるんですか。

【伊藤会長】 これは高いんでしょう。500%くらいあるんでしょう。

【白井企画広報部長】 500%です。

【伊藤会長】 500%。すごいんですよ。

【寒竹委員】 面積でいえば、どれくらいになりますか。

【白井企画広報部長】 2.4ヘクタールありますから、12万平米のものまでいけます。

【内藤委員】 すごいですね。

【寒竹委員】 すごいですよ。ここで数字的に出てきたのが、1,000平米程度とか350平米程度です。だから、少なくともいいのであれば、静岡には豊かな空間があって、文化がそこにあるというような、東京とは違った、東京だったら高いビルを建てて狭いところにどれだけ詰め込んだかという価値と逆のことができるような気がします。

今のところは、そんな感じです。

【伊藤会長】 ありがとうございます。

【白井企画広報部長】 冒頭御説明しましたように、昨年末で基本構想をまとめた中で、「文化力の拠点」の中のコンセプトなり、機能なりを一度取りまとめたんですけども、その中で、今回、専門家会議の中で御議論をいただくために、今、あえて必要なものに絞り込んでいる段階で数字が低くなっています。それと、第1回目の時の会議で御意見のありました南側の道路を生かすためには、目いっぱいまで建物を建てるのはいかがなものかというお話がございました。そこは、やはりある程度余裕をとろうとすると、そこを緑とか花で連続性をとろうと思うと、先ほど言いましたような容積率いっぱいまでの建物は難しいだろうと感じております。

【伊藤会長】 ありがとうございます。

石原委員、どうぞ。

【石原委員】 まず、資料2で、「創造・発信」ということで「世界水準の文化や自然の美しさを実感できる機能」とありますけれども、日本国内で庭園と建物が本当に美しいというものは、僕は一個もないと思います。これを私は世界水準と位置付けて、なおかつ704品種もありまして、これを全部ここでPRできる。

前回もお話ししましたが、世界中の人がこれを見たいというような庭園とか建物、例えば各フロアが全部12階建ての庭でもいいではないか。庭の中にこういった施設があるとか、最も世界で前衛的な建築と庭園の融合、その美しい空間があるからこそ、そこに学びたい人がたくさん集まる。私は、庭園そのものが勉強の素材になるというような世界水準が、今だったらまだチャンスはあるのかなと。そういった意味で、建築の方、またランドスケープの方々、また造園の方々等、粋を集めたものがここでできると、すごくここに来たいとなって、なおかつ、それが観光、また、その中でお茶、食を学べるようになったらいいのではないかと思います。

【伊藤会長】 ありがとうございます。

東先生。

【東委員】 今日は「文化力の拠点」としての施設の機能ということで、資料3の大学コンソーシアムの拠点機能の形成の観点から、私はこれからの世代、若者たちに期待したいところで、「大学と地域の連携機能」という拠点としての位置付けを考えます。東海大学も地（知）の拠点の採択をいただいております。先日、12月6日も我が清水キャンパスで全国の東海大学の研究者が集まりまして、地（知）の拠点、それぞれのキャンパスでの地域との連携をどのように進めているかという発表会が行われました。その中で、今大学が求められているもの、また地域が求めているものという地域課題に対しての、教育プログラムの改革が求められていると思っています。その点から、この施設機能はとても大事であり、静岡にとっても大事であり、次の世代を担う学生たちにとっても非常に大事であると考えます。

学生たちの様子を見ていますと、のんびりして育っております。その中で、彼らが色々触発を受け意欲を燃やす時は、やはり他大学の学生と交流し、異なった専門の人間たちとの交流が、学びや人生の共有があり大きく人間が変化する時があります。

資料3で、新しい時代に向けた地域と連動型の学びの場を提供する、進めることは大事

だと思っています。先ほど事務局からの説明で「学ぶ・人づくり」と「出会い・交わる」、「創造・発信」ということが異なるコンセプトになっていますが、私は、人が出会い、交わることによって創造・発信が生まれますし、学び・人づくりによってやはり創造・発信になっていく。コンセプトを分けてしまうと、分かりにくくなるかと思うので、是非、御検討をお願いしたいと思っています。

海外からの留学生と共に、日本の学生間同士とも多文化の中で学ぶ場を提供する。山の恵み、海の恵みの豊かな自然環境を切り口、コンセプトにし施設づくりに取り組んでいく方がイメージが湧きやすいのではないかと思います。

また、実は、静岡市の御協力をいただきまして、私たち研究室では、東静岡駅に直近したこの拠点施設を建設するに当たって、駅周辺の居住者が、景観・まちづくりに対してどのような意識・意向を持っていられるのか、どういう人たちがここに住んでいらっしゃるのかということをも11月中旬に調査しました。全戸で2,091戸あります。そういった中で35.8%の回収率、749通の回答がありました。

皆さんは、ここでどういった方がお住まいになっていらっしゃると思いますか。私は、高齢の方が多くいらっしゃると思っていましたが、30代が25%、40代が24%、50代が18%と20代から50代が7割を占めます。

【伊藤会長】 若いんだ。

【東委員】 そうです。若い世代がここに住んでおります。そして、16%ぐらいの方が県外から、そして49.9%の方が市内から、交通の利便性が大変高いということで転居してきております。

私は、全県にとっても、世界にとっても、大事な「文化力の拠点」施設を考える必要がありますが、やはり居住する人々の意識も大事なのではないかと思います。居住に関する、また景観に関することを調査しました。詳しく説明することは割愛させていただきますが、文化の施設、環境を望む意向もありますし、緑の豊かな快適な居住環境を望んでいます。もちろん、富士山眺望も重要とありますが、子育て中の若い世代だということで、公園とか遊び場、それから生活道路の整備とか日照とか風通しに、満足もしていると回答しています。

しかし、重要だと感じているが、満足度が低いのは買い回り環境、医療機関、交通対策等です。マークイズがあるのですが、鉄道による分断もあり、もう少し身近なところで買い物をしたい、やはり転居された方が多くいらっしゃるのでは、何か災害とか安全性の問題

点からコミュニティ環境が欲しいということが重要度として挙げられています。また、子育て世代が多いので、保育とか子育て施設、それから高齢者の介護施設の重要度が高く、満足度が低い施設になっています。

また、地域の歴史ということで、古代東海道についても設問しましたが、満足度も低く、重要度も低い結果です。これは大事な資産ですので、どのようにこの施設の中で皆さんに周知していくのか課題になるかと思います。

個人的な意見になりますが、街道文化、今までは東西の交通が発達し、通過県であることから、静岡の文化が根づかないと言われてきました。しかし、だからこそ発展もいたしました。そのような点から、一番最後に記述されている「歴史の観点から静岡を学べる機能」のところでは、ぜひ古代東海道だけではなく、街道文化としての展示をお願いしたいと思います。東海道を、時代を超えて、タイムスリップしバーチャル体験できるような空間があったら楽しく、街道の歴史から静岡の発展を知る機会にもなります。また、後ほど、アンケート調査についてはお話しさせていただきます。

いろいろ施設、例えばコンビニとか、東静岡駅の中にも施設が欲しいとか、の要望はございましたが、これは先ほど野知部長がおっしゃった都市景観検討技術会議の方で具体的に進めてまいりたいと思います。

【伊藤会長】 そうですね。そちらのほうの仕事はとても大事ですね。

【東委員】 私は、ここの核施設だけではなくて、周辺全体としてどのような空間を拠点として提示し、先ほど石原委員もおっしゃられた世界に発信できるような静岡の文化というものを創造していくような拠点にしたいと願っています。

以上です。

【伊藤会長】 恐縮です。ちょっと合の手を入れてしまうんですが、何か通常僕たちが言う、この地域が新しい山の手みたいな感じの人たちが住んでいるということですかね。若くて、市内からかなり移動されてきて、割合勉強されて、文句も多いが、それなりにIQも高いというような人たちが来ているんですかね。

【東委員】 そうですね。勤務地がここであって。

【伊藤会長】 勤務形態がね。

【東委員】 はい。ただ、今、市役所の方でも色々検討していただいていると思いますが、やはり新しくつくった都市なので、自治会とかがこれからです。

【伊藤会長】 そういうものがないということね。

【東委員】 通学環境が小学校は伝馬町まで行かなければいけないとか、新都市の形成の過渡期というところで、まだまだこれから色々考えなければいけないと思います。是非、より良い、豊かな環境にしていきたいということもありますので、是非、意向を酌み取りながら、市民の力を巻き込んで、この拠点整備に向けていただければと思っています。

【伊藤会長】 どうも恐縮です。ありがとうございました。

それでは、ぐるっと回って恐縮ですが、藤田委員から御発言をお願いできますか。

【藤田委員】 本日、たたき台のイメージということで御説明をいただきまして、方向性としては理解ができました。その中で、今回の計画中の建造物でございますが、非常に多機能であり、多くのものを詰め込むということは、この施設に来られる方々の利用動機を広げるという点ではよろしいかと思うんですが、もっと特徴的なとか、とがった何かが必要なのではないのかということ強く思います。

先ほどからも御意見が出ていますが、図書館にしても、静岡の食材が食べられるレストランにしても、カフェにしても、ホテルにしても、植物園にしても、ここに来なくても他にあるということですね。先ほど荒木先生の方から御説明をいただきました大学コンソーシアムについては、他にない、これがあることによって静岡の大学に来たいとか、あるいは地域との連携、大学とのつながりがあることによって静岡の企業に就職したいとか、そのようなところにつながれば、非常に大きな差別化になると思いますので、素晴らしいと思うんですが、とにかく、もっと人の賑わいにつながるような、とがった機能がないのかなと思います。

前回の会議で、東静岡に森をつくるんだ、緑をつくるんだということ川勝知事が強くおっしゃられておりました。先ほど石原先生の方からもそのような御発言がございましたが、とにかく、何かここにしかない、これという特徴的な機能、それが緑であってもいいと思うんですが、例えば花の都とか緑とか、そういったものをもっと強く打ち出しながら、県内だけではなくて県外とか海外からもばんばん集客ができるというか、人が集まるような機能が必要ではないのかと思います。

以上でございます。

【伊藤会長】 ありがとうございました。

それでは、酒井委員、どうぞお願いします。

【酒井委員】 今回、観光コンベンション協会の理事長の立場で参加しておりますので、まず観光的な話を1つ申し上げたいと思うんですが、1カ月ほど前に全国の商工会議所の

観光振興大会を静岡で行いました。私は実行委員長をやったんですが、1,500人ほど、全国から会議所の会頭等にお集まりいただいてやったわけですが、そのときのテーマが、文化・歴史に学ぶ観光振興というタイトルでやりました。それは、ちょうど今年が家康公顕彰400年という、静岡にとっての歴史の一つの大きなイベントがあったということ、それと文化という切り口は、富士山が世界文化遺産登録をされた時にちょうどエンタリーするタイミングだったものですから、文化遺産であるというところから、どこの地域にも歴史と文化があると。だから、それを学ぶということが、プロセスなり、あるいは成果物というものが観光に結びつくんだというキーワードで、文化・観光、そして文化・歴史、そして学びというテーマで全国大会をやったわけです。手前みそになるかもしれませんが割とこれが評価が高くて、今までそういう切り口で観光の全国大会をやったことがないということで、この大会は、過去においても、例えば先ほどもちょっと出ましたが、街道観光であるとか、あるいは産業観光であるとか、グリーンツーリズムであるとか、そういう言葉が生まれている大会でございまして、そういう中で観光というものが、今、地域経済の振興に非常に重要になってきていると。交流人口をいかに増やすというキーワードの中で、観光というのが地域の経済とニアリーイコールになっているという観点から議論をした大会だったわけです。

そういった観点から、今日のコンテンツを見させていただきますと、一番上の囲みになるんですが、ここに色々な、まさに文化・歴史等の言葉がありまして、その魅力発信ということコンテンツの中身とされている。これは良いんですが、やはり魅力発信というのは、非常に、平べったい表現と言うと事務局に失礼なんですが、魅力の発信の次に何を発信するのかということちゃんと議論しなくてはいけないと思っております。私は、やはり観光というのは人が動かないと意味がないので、ここが静岡県全体の観光のゲートウェイ的な要素を持って、ここに来た方がこういった映像を見ていいんですが、その後、どうやって行くかという具体的な手段の説明であったりとか、もろもろ、宿泊の説明であったり、単なる観光案内ではなくて、こういった実際の映像と結びつけた、どうやって行くかというような情報がちゃんと発信できるような機能をぜひコンテンツの中に入れていただきたいなど。おそらくこれからの具体的な議論のテーマになるかとは思いますが、魅力発信だけで終わらないで、その先に何を発信していくとかいう議論を是非お願いしたいというのが1つでございます。

もう一つは、地元での経済界に身を置く立場として、まだビジネスモデルがよく理解で

きていないところがあるものですから、これについては繰り返しになるかもしれませんが、大学コンソーシアムの中でも宿泊あるいは留学生の短期的な宿舎の提供という表現、あるいは以前からありましたが、ここには宿泊施設が民間の提案によりということが書かれておるわけです。ここが自分はまだよく理解できておらなくて、今後、市場調査等を含めて議論していくということですので、本当、市内の実情をきっちりご覧いただいて、議論させていただければと思っております。

というのは、このエリアだけの市場調査をやったら、おそらく成り立つんだと思います。しかし、ここに大きい宿泊施設ができた場合に、今、市内、特に静岡駅前にあります市民がよく使っておりますシティホテル系はおそらく駄目になります。今回、私も具体的に言っていていいかというのを2つのホテルから確認をとっておるんですが、私もセンチュリーホテルの取締役をしています。ですから、決算の状況を全部分かっています。アソシアの方も、ここで言っていていいかという話をして、オーケーをとってあります。要は、全然成り立っていないわけです。宿泊の部分は、今、もう宿泊率が8割後半から9割近い稼働率ですから、なかなかそれを増やすというのは難しい。静岡で日曜日の宿泊というのはがたんと落ちますから、それ以外でほぼ100%とさせていただいて結構です。ですから、残りは何かというと、バンケットの類いが非常に苦戦している。

ですから、東静岡にそういった機能を持った施設は成り立つんですが、それができた場合に、街中の2つが成り立たなくなる。そういうことを考えた時に、ここでいうホテルというのはどういうものをつくっていくべきなのかということは、東静岡だけではなくて、静岡全体で議論しなくてはいけないことなのです。あるいは、民間でホテルをつくるという場合に、大学コンソーシアムに合わせたような宿舎の提供というものが、現実的にどうやったら成り立つのかというのは、私どもはビジネスホテルも展開しておりますので、その観点からいくと、分からないというのがございます。その辺も、今後、市場調査という中でございますけれども、是非議論をしていただかないと、ここだけで走ってしまうと全体のバランスを欠くことになることを若干心配しております。

以上でございます。

【伊藤会長】 ありがとうございます。

それでは、石塚委員、お願いいたします。

【石塚委員】 まず最初に、私はグランシップの経営をやっておりますが、今の建物はメンテナンスに大変手間暇、それから、費用も大変かかるんです。ですから、これからの

財政を考えると、やはりできるだけメンテナンスのかからない施設にしないと、結局うまくいかないだろうということは、是非、御認識いただきたいと思います。

それから、「文化力の拠点」というのは、にわかにはイメージが浮かんでこないんですが、例えば日本ではモデルになるような場所があるのかどうなのか、もしそれが分かっているならば、イメージするために教えていただきたいと思います。

それから、文化・学術ゾーンをつくっていかうということですが、現在欠けているものは何なのかというところを分析して、静岡の場合には県立美術館だとか、外にそういう施設が出ていますので、それとの関わりをどうするかとか、その辺の詰めもやっていただいた方が良いだろうと思います。

もう一つは、やはり人を集めようということが大事になるとと思いますので、本当に県民は何を望んでいるのか、どういうものがあれば県民としては望ましいのか、それから県外からお客さんを集める場合には、県外のお客さんが静岡に行って、あれを見たいという、さっき、とがったという話が出ましたが、そういう観点からの検討をやらないと、でき上がったときに実際にうまく機能しないような気がして、その辺を心配しています。

以上です。

【伊藤会長】 後ほど、荒木委員にお伺いしたいと思いますが、私、黙っていても、ここへわっと色々な人が来て、ある目的を遂げて帰っていくようなマグネットみたいなものは一体何だろうと思うと、石原委員がおっしゃったようなものをやるとマグネットになると思うんですが、情報センターをつくったり、食をつくったりというのは、客がそれで来るかなという、もう一つ腑に落ちないんです。

何がここでマグネットになるかという、これはとんでもないことなので多分だめになるのを覚悟しているんですが、立命館のアジア太平洋大学があったでしょう。

【荒木委員】 大分にあります。

【伊藤会長】 大分の。あれのもう少し洒落て、小規模で、あれほど大衆型でない、そういうものをここに県がつくられたらどうか。だから、外国人を80%ぐらい入れてしまう。定員が400人くらいで、あと日本人を入れていくとか、要するに、ここの教育で全国でどこにもあまりないようなものをやると、食堂にも人が集まるし、会議室も、学生だけではなくて、夜になったら、そこで議論が行われるとか、何かそういうものができたら人が来るかなと思うんだけど、あとはなかなか思いつかないんですね。だから、JTBが観光バスを毎日ここへ10台持ってこいというような県の指令があって、持って

きて、それで飯を食わせて、さっと帰るとか、そういうものではつまらないでしょう。だから、やはり何か自動的にわっと来るような。荒木先生、どうですか。観光と行く前に、国際化という話題があって、やはり国際化で外国の学生を3分の2ぐらい入れると、日本人の学生もかかってくるんですね。

【荒木委員】　そうですね。今、伊藤会長がおっしゃられたことは、一つの大学の拠点的なものをつくらうということですね。

【伊藤会長】　そうです。

【荒木委員】　大分の立命館の例は、一つの広大な土地が田舎にあって、いわゆる研修センターに近いんですね。留学生が圧倒的に多い。その機能がやはりお手本になっていますが、いわゆる研修センター的なものは、富士山麓にも我々は持っているわけです。

【伊藤会長】　ありますね。

【荒木委員】　そうすると、そういうものが機能するようにするということは、今、伊藤会長がおっしゃられたようなことで再機能させるといいますか、古い形の研修センターをもっともっと新しくする。

【伊藤会長】　そうです。

【荒木委員】　そういうところに若者が集まるという、そんな形のほうがいいかな。東静岡の場合はずっと小規模ですし、そうすると、一つの大学的な、あるいはそういうものをつくるということは、あの場所にふさわしくないのではないかという気はします。でも、そういう機能的なものといえますか、ですから、そこに大学としてあって、そこに通う、あるいは寄宿舍としてほとんど全員があそこに寝泊まりをして教育を受けるという形のものだったら、もっと別の場所にやるべきではないかなと。

【伊藤会長】　なるほど。もっと広いところにね。

【荒木委員】　はい、広いところ。富士山麓にあるものですからね。それで、前例もある。

ただ、そうしますと、東静岡にふさわしいものということになると、やはり寄せ集め的なことになってしまう。単なる寄せ集めは困る。しかも、寄せ集まらない、せっかくつくっても人が来ないということになると困るので、困らないようにするには、魅力をそこに持たせないといけない。しかし、それはあくまでも短期間だと。留学生もずっとそこにいるのではない。留学生は本来大学に集まる、例えば、静岡大学に集まるが、在学中に静岡県がどんな県であるか、日本の文化はどんなものか、富士山というのは何だというような

ことをみんなで共有するというのを学ぶ共同授業で共有することは、現在、行われつつあります。そういうことを行う場所としては、やはり東静岡がふさわしいだろうと。ですから、本来的にあるべきものと、それから、あそこの限られた場所で活用するというのは、やはり限定されるべきではないかと思っています。ですから、私も共同授業をあそこで全てやれば良いなんていうことは言わない。そんなことをやったら、浜松から来るのは大変ですから。

【伊藤会長】 大変なんですよ。だから、僕もそう思ったんですよ。

【荒木委員】 ですから、SNSとか、そんなことを言っているわけです。

【伊藤会長】 SNSでやると、集まらなくていいですよ。

【荒木委員】 ただ、やはり集まるように仕向けることは必要です。

【伊藤会長】 SNSでみんなやっているのは、集まらないで全部交流をやっていますからね。あれは拡散型なんですよ。

【荒木委員】 そうですね。ただ、SNSの良いところは、そうやって拡散型で学んで、集まらなくても良さそうなんです、その弊害も出ているんです。

【伊藤会長】 そうそう。

【荒木委員】 それをSNS的なものでやった大学を修了した学生を本学で引き受けましたが、非常に個性が強いんですね。色々な人と交わっていないものですから、卒業して大学院に入ってくれたんですが、やはりインターネット、そういうことにだけ集中してしまっている。そうさせないためには、やはり面と向かって集まる。それが楽しい。それをしょっちゅうやるのではなくて、イベント的にやるしかないだろうというのが今回の案です。

【伊藤会長】 ありがとうございます。

伊東学長、御意見を何か。

【伊東委員】 まず最初に印象なんです、一つ一つ独立に見ていると、みんな良いなと思うんだけど、それぞれのユーザーが全部違うんですよ。例えば、一番上の情報発信スペースは、一体どういう人がどのくらい活用するつもりでつくるんだろうか。国内外からの来訪者という御説明があったんだけど、では、それがどのくらいの規模ここに集まるのかというのと、集まって、これを見た人が他に何かやることがあるのか。いっぱい機能があるんだけど、それぞれの機能が違うユーザーを想定して寄せ集めているようなんですよ。

それから、食事をとるという場合でも、県外からの観光客がここでとりたい食事と、若

者や外国人がここでとりたい食事は全然違うわけですね。

どういうユーザーを想定してつくり込んでいくのかというところが、割とばらばらな印象なんです。

私も荒木先生と一緒にこのコンソーシアムの活動をしているので、1つ思いっきり大胆なことを言ってしまうと、ここのユーザーは若者、学習者、生涯学習でお年をとって学びたいという人とか、あるいは幼少期からも含めて何か学びたいと思っている人間と、あと外国人。外国人も、半分以上は多分学ぶために日本に来ている外国人をメインユーザーに据えてしまって、そこからスタートするだとかというような形で、この建物のメインのヘビーユーザーを想定した上で機能を広げていかないと、何か收拾がつかなくなってしまうかなという気がするんですね。

【伊藤会長】 伊東先生、後でまた御発言があったら、お願いします。どうぞ。

【石原委員】 きょうは漠然とということですが、私は、キーワードをまず1つに集中させた方が良いのではないかなと思います。この建物はそもそも何の文化を世界に発信するのかというようにキーワードを1つに集中する。そのキーワードに集中した時に、世界トップレベルの、私だったら、緑に関する本が世界一ここにある。そして、例えばシンガポール、イギリス、ニュージーランド、アメリカですとか、そういった先進国の先生たちが来て、そこで短期型、長期型、中期で学べる。特に環境とか、そういったことに、例えばという例ですけれども、それ1つで足りないのであれば、お茶、食ということに限ったライブラリーが物すごくある。そこに対して、また教授陣が世界中から集まってくるというように絞った方が、たくさんあるよりも良いのではないかなと。そのキーワードに合わせて全ての設計、デザインがなされていくと、面白いのではないかと思いました。

【伊藤会長】 先生、今の御主張の中で、例えば世界中の庭を、ここへ来ると部分的でも学ぶことができるとおっしゃいましたが、そういうところは世界でほかにどこにもないんですか。どこか、例えばブッチャートガーデンみたいなところへ行けば分るとか。

【石原委員】 いや、あれはただ風景だけですから。

【伊藤会長】 風景だけです。

【石原委員】 例えば、ガーデニングに消費する金額は、イギリス6,000万人の人口で4兆円です。日本は1億2,000万人で3,000億円しかないんです。

【伊藤会長】 そんなものですか。

【石原委員】 そうです。先進国の中で最も花を使わない国が日本です。江戸時代は、

世界で最も庭師が多い国が日本だったんです。最も日本が園芸に消費していたんです。これは、260年間戦争がなかった。徳川家康公が庭園文化を広げた。それを世界中の人が真似たわけです。その原点を学びに来るということは、静岡ならでは、そこに富士山の文化だとか街道文化とか、その中心は、徳川家康公が庭園文化、世界一庭師が多い国だった。それをもう一回この静岡で学び直すことが、ひいては世界平和へもつながると、ちょっと大きく私は思ったりするわけです。すみません。イギリスで学ぶものは物すごくあります。

【伊藤会長】 どうぞ、副知事。

【難波副知事】 大体、こういう会議をやると、こういう会議ではなくて、理念なくやると、機能の足し算的なものをやるんですね。こういうものにして、その後さらに、ではデザインはこういうようにしましょうとか、建物はこういうようにしようと足し算をやっている、全体ができてみると、何ですかね、これはという感じになるようなことで、今、進んでいると思うんです。我々の提案がそういうことだったと思うんです。コンセプトはこれで、では入れるべき機能は何ですかとずっと出してもらって、そのときに、ではデザインだとか建物はどう配慮したらいいですかという感じなんだと思うんです。そこがそもそも間違っていて、今、石原先生からお話がありましたように、何を文化として発信するのかというところがまだ明確でないと思うんです。

空間そのもので文化力を見せるということもありますし、石原先生はそういう提案もあったと思うんです。それから、他の委員の方々は、これは文化の発信ということですから、あるいはエントランス機能とか紹介機能なので、ここそのものに文化があるわけではなくて、エントランス、紹介機能、発信でも良いんですけども、あるいは今度はここそのものに文化力を持たせるという議論もありますね。この建物の中で文化力があってというものもあります。それから、もう一つは、コンソーシアムそのものは大事ですけども、それを集客力として見るのかどうかという問題もありますよね。そういうことで、かなりばらばらの議論が一遍にされている。こちらがそういうことを提案しているから、そうになってしまうんですが、何を文化力と考えて、どう発信するのかをもう一回考え直さないといかんという感じがしております。

以上です。すみません。

【伊藤会長】 ありがとうございます。もう一回回りますが、内藤先生、印象を。

【内藤委員】 会長が割と思いついたことを言うので、僕もちょっと試してみようかと

思います。

【伊藤会長】　　あまりまだ言っていない。思い切ったことを言うと、とんでもないことになるから、黙っているんだけども。

【内藤委員】　　この間、冒頭で、会長が区画整理なんかやらない方が良いのではないかという驚くような発言をされましたけれども、建築ありきで語ると何かゆがむような気がして、建築がなかったらどうなのというところから、本来、議論を立ち上げるべきだろうと思いました。

それと、何か新しいことはないかと会長が言われていたので、ずっと考えていたんですが、役所が最も苦手なことをやるのはどうか。例えば、建物が常に増殖していくとか、全部オール・イン・ワンでつくらないとか、グランシップは良い例ですが、つくってどうだという感じではなくて、5年ぐらいたって行ってみると、また違うものができていて、また5年ぐらいたつと、また違う形で増殖していったとか、変化していくとか、未来がちょっと見えにくい中で、そういう考え方もあるのではないかと思うんです。もちろん、植物も育っていくとか、同じように育っていくような、だから、今はシーズというか、種を幾つか最低限、機能的につくっておくみたいな公共施設のあり方はないかなと思いました。

【伊藤会長】　　プレハブメーカーだったら、スミニあたりにつくらせたら良いのかもしれないね。

とんでもないことを言うんですが、ここを容積100%にしたらどうですか。木造2階で建ぺい率40%ぐらいで、小さい木造2階をいっぱいつくって、そうすると、みんな面白がって、その小さいところにお茶屋さんもあり、こっちに食べ物屋もあり、真ん中に学生のセミナールームがあるとか、ごちゃごちゃにして、JTBのバスも、収容力が少ないから、そんなに何十台も来ない。5台ぐらい来れば、大体その建物を全部使い切ってしまうとかね。

【内藤委員】　　それがどんどん変わっていくとか、増殖していくとかすればいい。

【伊藤会長】　　うん、だから、中を模様変えすればね。改築というのは、柱を1本残せば建築基準法の確認申請が要らないんですよ。だから、好きなようにやればいいんですよ。

【内藤委員】　　この間、記事を読んだんですが、パリのポンピドーセンターが1971年だか1972年にできましたが、あれのミッションは変わり続けることなんですよ。だから、常に中のキャラが変わっていつているわけです。公共事業で割と苦手なのは、一

且つくってしまうと、今度は維持をどうしようという感じになるので、せっかくだから、新しい公共事業のあり方みたいなものを、ここで、それこそ文化力でやったらどうかと思うんですが、そういう提案をしたい。

【伊藤会長】　　せっかくだから、花も物すごく重要ですが、静岡は林業県でしょう。やはり林業県としての素材をそこで見せるとか、それから林業県としての林の育て方の種ぐらい——木の種は大変なものなんですよ。見せて、おっ、こんなものかとか、こっちに花屋さんがあるとか、狭いのにそういうものがあって、その横っちょにお茶のお仕舞いするところとか、食べ物屋があるとか、学生の寮があるとか、地下のちょっとしたところに映画館があってね。何かこれは、静岡の川勝知事らしくないものを、今みんな考えているのではないかと思うんです。逆説的だけれども、スペースが大き過ぎて、頭の中で使い切っていないんですよ。駄目だったら、木造ですから、もう一回やり直しで全部ばっ壊してしまう。資本投資もそんなに大したことないです。これ500%で12万平米で大体3万5,000坪でしょう。坪150万円でいうと、400億円ですよ。今の時代、そんなものはあり得ないね。

【難波副知事】　　あり得ません。

【伊藤会長】　　あり得ないね。

【難波副知事】　　当然ですけれども、全部使うということはありませんね。

【伊藤会長】　　あり得ないでしょう。

【難波副知事】　　ええ。12万平米で平米30万としても400億、40万だと500億ですから、そんなお金を投資するということはありませんね。

【伊藤会長】　　それで、ご存じのとおりメンテが大変なんです。20年ぐらい経って、コンクリートだからメンテすると、それを使えないんですよ。では、壊すかと。だけれども、木造でちまちまだったら、少しずつメンテして行って、永久運動でメンテがずっと続いているんですよ。きっと、お花屋さんもそうでしょう。あちこちでいろいろな花が流動的に動いていくんです。植える場所がね。

それから、もう一つ、副知事ね、静岡空港が様変わりしたわけでしょう。だから、観光の話をもう少し積極的に考えてみたらどうかと思うんです。文化、文化というと、文化は品がいいからいいんだけど、観光はちょっと次元が低く見られるんです。だけれども、これから日本は食っていかなくてはいけない。きっと文化を使った観光でしょうね。

【難波副知事】　　静岡の観光は文化力で見せる、引きつけるというのをテーマにしてい

ますので、そういう面でも、ここを文化力の拠点にしたいと。

【伊藤会長】 ずばり言うと、具体的な質問で、街道文化として見せるというと、江戸村をつくりませんか、つくらないですか。明治村というと、割合格好いと言うんだけど、江戸村というと、みんなばかにするんですが、観光ということになると、そういう話がだんだんリアルな話で出てくるんですよ。どうぞ、部長。

【白井企画広報部長】 先ほどからの御議論の中で少し言い訳がましいことを言わせていただきますが、今回、1つ、本当にたたき台として御提示をさせていただきました。このたたき台をつくるに当たっての前段、条件としては、昨年1年間、伊藤会長と石原委員については御参加いただけませんでした。今回、専門家会議に出席していただいています8名の皆様方には、「“ふじのくに”の『文化力』を活かした地域づくり基本構想」の取りまとめにお力をいただきました。

その中で、東静岡駅の南口のコンセプトはこういう形でいきたいと思います。そして、色々な機能についての御提案もいただきました。今回、専門家会議ということで、それを絞り込んで箱にしていく作業をしていただくわけですが、そういう点での、まずもう一度たたき台というような形で、本当にこういう機能でいいのだろうか、これが「文化力の拠点」としてふさわしいのかどうかということをもう一度御議論いただくためのたたき台として御用意しましたので、様々に、これでは静岡の「文化力の拠点」にふさわしくない、こういうようなものをすべきだ、またターゲットをもっと絞るべきだという御意見をたくさんいただきましたことについては、事務局として、また整理をいたしまして、御提案を申し上げます。

観光という部分につきましては、基本構想を策定するときにお話をさせていただいているんですが、世界水準の魅力というものが、やはり静岡が国内外から人を引きつける原動力になっていると考えておりますので、富士山をはじめ、世界遺産、それから世界水準での南アルプスでありますとか、伊豆のジオパークでありますとか、様々なそういうものについては、先ほど申しあげました多目的な情報発信機能のような中で発信をし、その発信をした後、そこへどう行くか、どう導いていくかということまでも含めたソフトを用意して対応していきたいと思っております。

それから、建物について、会長から2階建てという話もございましたが、今回このたたき台をベースにしまして、様々に御意見をいただいた中で、適切な規模感をもちまして、次回、また建物としての全体の面積がどのぐらいになるのかというものについてもお示し

をしていきたいと思います。その場合に、各階ごとに切れるのではなくて連続性を持ったものでありますとか、なるべく眺望を活かして高さをとれるものでありますとか、様々なパターンがあると思いますが、そういうものについても検討させていただきたいと思っております。

【伊藤会長】 ありがとうございます。ちょっと専門的なことを言うと、12万平米という頭で皆さん、物すごくでかいところを埋めるのは大変だと思いながら、でかい空間を埋めるような提案がここにあるわけですが、僕は2階建てぐらいの容積でやったらどうなるかという、随分こういうものは生きてくると思うんですよ。

【白井企画広報部長】 おっしゃるとおりで、私どもは500%であるからといって、12万平米の建物を建てようというつもりは全然ございません。

【伊藤会長】 絶対ないでしょう。

【白井企画広報部長】 先ほども御説明いたしましたように、南側の歩道との距離でありますとか、周りの空間を活かしていかないと建物も映えないだろうということもございます。それは、今日、皆様方にも様々な御意見をいただいた中と共通しているところだと思っております。

ただ、「文化力の拠点」として、観光客の方も含め、それからまた若者が集い、賑う、学べる建物、施設にしていくために最低限必要な規模はどのぐらいになるのか、そこら辺のところの品定めといいますか、そういうところを、今日、様々な御意見をいただく中で絞り込みもしていきたいと思っておりますし、また、大学コンソーシアムの拠点というのは、今日、皆様方からも本当に重要な施設であるというお話もございましたので、それをどのぐらいの規模で持っていくかということは、また伊東委員、荒木委員と色々御相談もさせていただきたいと思っております。

【伊藤会長】 僕も学校の教師を半世紀やっているのですが、ついついしゃべってしまうんですけれども、大学の交流は難しいんですよ。慶応と早稲田なんて、大学の先生同士、会ったこともないです。教員採用はやりませんがね。

あと、ふと思ったんですけども、SNSの逆ですけども、丸の内——突然話が丸の内に行くんですが、丸の内には色々な企業があるでしょう。それもつき合いたいとやっているんですが、情報がそんなところに集まるのも難しいんですよ。部分的な、猶興の士がちょっとヨガをやるとか、そういうものはあるけれども、マイナーなんです。そうすると、何が起きるかという、ローカルな小さい丸の内のテレビ会社をつくっているんです。そ

こで、いろいろな情報を発信しているんですよ。

ふと思ったんですけども、荒木先生、だから、フェース・ツー・フェースもあるけれども、やはりここで一番重要なのは、ローカルなテレビ会社があって、そこにいろいろな大学の先生が来て授業の提供をしたり、楽しいアイデアを出したりして、テレビでそれを配信して、たまに学生が来るとか、何かそういうこともあるかなと。

【荒木委員】 実は、それを想定しているんです。

【伊藤会長】 想定していますか。

【荒木委員】 ただ、その時に、例えばいろいろ集まるときに共通語が必要ですよね。

【伊藤会長】 はい、そうです。

【荒木委員】 e-learningといっても、i-learnといってみたり、e-learnといってみたり、大学によって違うんですよ。SNSで学ぶということになると、SNSはもう誰にも開放されていますよね。しかも、無料でできる。学生は誰でもアプローチできる。誰でもできるということは誰もしないということにも通じてしまうものですから、それで、どうすれば通じるかという、やはりつながりなんです。教員と学生の間は、ここで一対一でつながるぞという、これがSNSの強みですよ。教員がそこに使う時間は、ほとんど数秒かもしれません。だけれども、あっ、つながった、自分がこれだけ勉強したことを教員が認めてくれたというシステムが、SNSでは構築可能なんです。

【伊藤会長】 なるほどね。

【荒木委員】 ですから、今後の教育は、そうやっていくと、結局、勉学とかそういうものは学生一人一人がどれだけ、どういように一生懸命それに対して向かったかということですよ。昔は、大学に来るか来ないかわからない学生は完全にもう放置ですよ。

【伊藤会長】 そうです。

【荒木委員】 ゼロになってしまいます。そうではなくて、そういう学生にも少し意を向けさせる。そういうものを向けさせるというシステムが、今、若者の間ではやってきているわけです。それを逆用する。逆用というのはおかしいですけども、あまり統一がとれていないのでは困るので、統一をとりながらということになります。ただ、そこに年寄りが入り込むと、そこで拒否されてしまうんですよ。だから、若者にある程度任せないといけないと思うんです。そのためには、共通言語が必要です。e-learningシステムは、やはりみんなで同じようにやらないと、静岡県の中でまとまりませんよね。静岡県内で言語が一緒になるとすれば、そういうe-learningのやり方をやればいい。その共通的なもの

のを選び出してあげればいい。共通語をつくってあげればいい。それは、例えばコンペでやればいいと。

【伊藤会長】 コンペね。

【荒木委員】 ええ。コンペで、俺のところのe-learningはこうやっているぞ、俺のところはこうやっているぞということを提案させてもらって、それを共通言語にするぞといたら、静岡県の中で自分のやっていることが共通語になるということは物すごく大きなプレッシャーになって、あるいはモチベーションが上がります。そういうことをやって、活用の方策を、自分たちが考えるのではなくて若者に考えさせる。

【伊藤会長】 なるほど。昔、テレビ5チャンネルは教育放送とってましたね。

【荒木委員】 そうですね。

【伊藤会長】 だから、静岡放送に新しく静岡教育放送というやつで、テレビ局のステーションを東静岡につくって、そこへ時々色々な先生が交替で来てレクチャーしたり、セミナーの様子をみんなに見せたり、そういうことは僕はあり得ると思うんです。

【荒木委員】 そうですね。ですから、それがしょっちゅうではなくて、時々学生が見る。それで、東静岡に行きたいなと思わせるようなやり方をしないと駄目ですよ。

【伊藤会長】 そうですね。だから、教育のところは、ユニークな、他のところで真似ができないようなことができそうな気がしているんですよ。

【荒木委員】 テレビ局というのも、インターネットテレビで、そんなに大したものはいらない。

【伊藤会長】 要らないですね。

【荒木委員】 大したことではないですね。もうどんどんつながって……。

【伊藤会長】 丸の内も、この部屋の4分の1ぐらいでやっていますよ。機材だけ入れて、中に二、三人いてね。

【荒木委員】 ですから、スタッフは学生だというつもりでやればいいと思います。

【伊藤会長】 そうです。学生でね。これはいけそうな気がするんだけど。

副知事、今度の場所に観光でいつもはとバスが10台ぐらいいるなんていうことは考えていないでしょう。要するに、集客力ですよ。

【難波副知事】 集客力で、そうすると、さっきの大学コンソーシアムのものというのは学生たちが来ますけれども、それと観光というのは多分直接結びつかない。そうすると、さっき申しましたように、コンテンツ、ここが発信拠点で、エントランス機能でどこかに

送り出すためにあるのか、ここそのものに集客力があって、その中のコンテンツが面白いから来るのかによって違うと思うんです。ただ、やはり色々なことを考えて、これだけのところで、ほとんどのバスが何台も来るようなものをつくる、静岡ならではのものをつくるというのは、なかなかないのではないかと思います。もしそんなものがあれば、みんなやっていますよね。だから、そこを考えるのはかなり無理があるのではないかなと私は個人的に思います。これは個人的意見です。

【伊藤会長】 先生、どうぞ。

【伊東委員】 外国人を入れるといった時に、ただ、ここに寝泊まりさせるだけではなくて、そこで静岡のために働いてもらうというか、外国人の留学生はアルバイトをしている者がたくさんいるんだけど、コンビニでレジを打っているよりも、もう少し前向きの建設的な生き方をして欲しい。

【伊藤会長】 そうですね。

【伊東委員】 例えば、色々な国からの留学生が来ているわけじゃないですか。色々な国への情報発信みたいなものを、留学生がそこで働きながら学べるようなとか、留学生にしても、例えば観光のために働くというのも良いだろうし、やはりこれからの日本人がグローバル化社会でやっていくためには、小さい頃から外国人がいるような環境で遊ぶというのが必要じゃないですか。だから、そういう環境をつくるためにも、外国人を少し集めておくとか、新しいオフィスをつくるという提案もありましたよね。それもあれば面白いと思う。そういう意味で、情報発信という機能も、そこにいる外国人と一緒に世界各国に向けて発信していくんだみたいな感じで、若者と外国人をここに集めるだけではなくて、ここに集めた若者や外国人に仕事をさせる、静岡のためにプラスのアクションをとってもらおうというような基地にするというような感じ。

【伊藤会長】 先生、僕は何かとんでもないことを言うんだけど、これだけの大学で20人ぐらいずつ外国人枠があって、少し拡充をしてもらって、ここに400人ぐらいの枠を東静岡がもらうわけですよ。原籍はそれぞれの大学ですが、ここで特別のワーキングプログラムをつくって、それを日本の職人さんとか先生なども教えて、ここでまさに旅行の案内をされるとか、ハンドクラフトで何かつくるとか、そんなことをすると、僕は物すごく面白い個性的な東静岡ができ上がると思っているんです。何かちょっとイメージですけれどもね。

どうぞ、東先生。

【東委員】 今、先生がおっしゃったように、静岡は大変ものづくり県です。伝統工芸や伝統技術を活かし、新しい時代・社会ニーズに合ったデザイン性を持たせたものづくりも可能なのではないのでしょうか。クールジャパン戦略の一つとして、他の地域では発展的に展開しています。多様な価値のコラボレーションをする場が、インターネットなどの教育だけではなくて、現場に行くオリエンテーションの場づくり。先ほど副知事がおっしゃったエントランス機能で、ここ静岡で多様なバリエーションを示す。お茶でも川根、島田金谷と、島田市でも3種類ある地域ブランドを知る場があって、日本の学生も海外の学生も、自ら出かけていく体験の場というのは、必要なのではないかと考えています。

地域理解とかボランティアとかシチズンシップとかグローバル社会への対応など、真の市民力をつける、ボランティアの精神を持つという、これからの自分たちの社会を築く人材育成、国内外の人たちをともに育てるような多世代のコミュニティという場の力が発揮され、面白い力、人材力になってくるのではないかと考えています。

また、先ほど申しました東静岡駅周辺地域に住まう30代、40代の方たちの子育て環境として、もちろん図書館なども要望はしていますが、精神的、物理的な支援環境も必要であると思います。色々な世代が交流できる場、空間が必要であり、それがどの程度の規模の施設なのか、広場なのかはこれから考えなければならぬところだと思えます。

【伊藤会長】 今日は意図的にはねているんですけども、ここへ来る外国人学生を1年間でも、全部この30代、40代の人たちのところへ下宿させてみたら面白いですよ。半年でもローテーションしていけば良いんですよ。

【東委員】 ホームステイですか。

【伊藤会長】 ホームステイです。

【東委員】 でも、分譲マンションにいらっしゃる方たちが半数以上いるので、そういったことでは、なかなか今、空き部屋を活用すればいいかもしれないですが。

【伊藤会長】 まあ、アイデアです。

【東委員】 そうですね。恐れ入ります。

【伊藤会長】 何か教育と国際化と、そういうところで、他の…。

【東委員】 ホームステイするならば、例えば川根に行って茶摘みをするとか、林業を体験するとか、そういったことをできる環境ではあるかと思っています。

【伊藤会長】 そうですね。だから、プラクティスと教育と、外国人と日本人の先生も学生も一緒になって、ごちゃ混ぜで時々会うような交流の場とか、何かそういうイメージ

だと、ここでやると、他のところではないようなプログラムができるかもしれないと思っているんですけどもね。

【東委員】 そうですね。

【伊藤会長】 どうぞ、御発言ございますか。まだ15分ございますから。

【石原委員】 先ほど副知事の方から、こういった事例がどこかにないのかというお話がありましたけれども、イギリスではエデン・プロジェクトという施設があります。エデン・プロジェクトというのは、自然の環境、それに住む生活の建物の仕組み、そして、そこで農業というものを一つのカプセルの中に入れてプロジェクトがありまして、これに物すごい人が集まっております。例えば、シンガポールのガーデンズ・バイ・ザ・ベイがありますけれども、これは植物園に500万人集客があります。

私は、今後、やはり環境ということに関してはすごく世界中の人が学びたいというのがあるのかなと。そういった中で、ゆっくりここで学べる。観光と文化というのは、僕は1つではないかなと思います。これを1つとして考えて、必要とされない空間だったら、なくなっていく。ですから、みんながここに来たい、必要とされる空間は何なのか。何度も言いますが、何をここで学びたいのか、何を見たいのか。そうしたら、来るなど言っても、外国人であろうが、誰であろうが、来ると思うんです。その火の玉のコンセプトが見えないので、私は先ほど、食、お茶、花というキーワードを文化として学んでいく。そして、それが観光になって、先生がおっしゃったように、でき上がらなくてもいいのではないかなと。それが街道みたいに江戸の街並みがあって、その一つ一つでも学べて、そして、ここに外国人が例えば勉強に来て、このエリアに住まなくても、どこか、このエリア外から、ここに東静岡というアクセスがあるので集まってくる。いろいろな宿に住まってもらって、ここが学校という仕組みができればいいなと思いました。

ちょっと熱くなりまして、申し訳ないです。

【伊藤会長】 先生のイメージでは、ここは3階建て、4階建てのコンクリートの建物ではないでしょう。木質系ですね。

【石原委員】 そうですね。今、陸上競技場のAプランを私どもは大成さんと一緒にやらせていただいております……。

【伊藤会長】 今の案件ね。

【石原委員】 そうです。これに関しては、今、私が担当しているのはコストダウンです。とにかく緑化のメンテナンスをいかに下げるかと。

【伊藤会長】 あれはすさまじいですよ。

【石原委員】 それをさせていただいて、今、私がアイデアとしてそこで出しているのは、例えば植木などはインスタントでいいじゃないかと。仮で来て返すとか。

【伊藤会長】 そう。だから、つぼでやればいけれども。

【石原委員】 そうなんです。

【伊藤会長】 あれを実生か何かで育てるって、絶対できっこないのを建築の審査員は何も知らないで、あれを選んでいるんです。あんな緑のやつはできっこない。

【石原委員】 私は、その後にコストダウンの話をいただいているんですけども、例えば明治神宮をつくったときに、いろいろな木をもらってやってきたじゃないですか。

【伊藤会長】 はい、やりました。

【石原委員】 古い家がどんどん壊れていって、すごくいい樹木がいっぱいありますよね。例えば、庭園のことに言っていると、難しいかもしれないけれども、広く県民全部参加型にして庭づくりとか、そういうことも考えたら、自分が寄贈したことで来なくなるのではないかなとか、そういったことも含めて、もう少し観光、集客ということも考えていただけるといいなと僕は思います。

【伊藤会長】 ありがとうございます。

あと10分ぐらい。藤田委員、何か突出したものというお話があったんですが、何か突出したものはありますか。

【藤田委員】 そう言われてもなかなか難しいところがあるんですが、この専門家会議の前の有識者会議の時に出た話の中で、とにかく静岡、この近辺には色々な文化施設がたくさんある。だけれども、残念ながら、それが点と点になってしまっていて、線で結ばれていない、面になっていない。面にするために、ここにどういった施設をつくるのかというような議論がなされたと思うんです。

それともう一つ、その中で出た話の中で、私はこれからも静岡にずっと住んで商売をさせていただくものですから、やはり今の静岡の一番の問題点としては、人口の減少というところがあるわけです。どこの地域でもそうですが、その中で観光ということの一つの切り口にすることによって流動人口を増やす、あるいは学びとか教育というところで定住人口を増やせるような、今日、色々な御意見が出た中で、何故これをつくって、将来的な静岡のためにどういうことになっていくのかということをもう一回皆様で共有をする必要があるのではないのかなということ、今日、この会議に出て思った次第でございます。

以上でございます。

【伊藤会長】 わかりました。

酒井委員、ホテルのお話があったんですが、これは非常に深刻な話だと思うんですが。

【酒井委員】 ホテルの話はもう結構でございます。

【伊藤会長】 いやいや、でも、ここへ何らかの宿泊機能を入れるとなると、それなりの影響が出てくるのではございませんか。

【酒井委員】 さっき申し上げたかったのは、バンケットの機能を非常に強く持った都市型のホテルをここにつくるということになると、そういうリスクがある。ただ、宿泊機能ということで特化していくのでしたら、まだ足りないことは事実ですから、そういった意味での議論はできるのかなと思います。

【伊藤会長】 なるほど。

【酒井委員】 ただ、今日は私も混乱しておるんですが、私も1年前の基本構想の会議に出ておりましたので、どうしてもその連続性の中で考えてしまうんですが、どこまで前回のやつとつなげて考えるのか、あるいは全くゼロの議論でいいのかが整理できていないものですから、一度事務局的にもその辺をまとめていただかないと、ちょっとついていけなくなってきたなという感じがしてしまっていて困惑しております。

【伊藤会長】 どうぞ、内藤委員。

【内藤委員】 今のお話で、私は、この2枚の紙に割と項目はそれぞれ網羅的に出ているのではないかなと思うんです。だから、それはそれとして、あと、これをどうつなぎ合わせて、もっと豊かにするか、特徴づけるかというのは、これを土台にしてやってもいいのではないかなという気はします。

【伊藤会長】 これを土台にね。

【内藤委員】 はい。例えばということと言いますと、ビジネスインターン向け宿泊施設とか書いてありますが、それと、例えば「茶の都」という項目をつなぎ合わせたらどうなるのかとか、この中でそれぞれつなぎ合わせとか、留学生の宿泊と「食の都」をつなぎ合わせたらどうかとか、そういう膨らませ方です。この台の上にマー جان牌はそろっているんで、あとはどうそろえて役満上がるかみたいな話なので、そのそろえ方を少し考えた方が良くはないかなと思います。

【伊藤会長】 的確です。一番良いことを言っていただきました。今の御発言も含めて、これは独立事象になっているんですが、これこそネットワークにすると、いろいろな組み

合わせができますよね。お茶と観光と宿泊とか、何かそういう言葉が幾つか出てきますよね。

【白井企画広報部長】 それプラス民間の提案を期待している部分がこの中に入っていないものですから、全体がここにある絵、写真になっているところだけという捉え方ではなくて、我々は、先ほども言いましたような宿泊施設、レストラン、それから緑茶カフェとか、そういうところが当然入るような賑いのある施設にしていまいますけれども、例えばコンソーシアムについては非常に御議論が進みましたが、もう一点、文化力を発信していく、人を集める、集客能力を高める、要は国内外から静岡を訪れる人にといい、いわゆる文化を観光に結びつけるという部分については、もう少し機能を考えなければいけないかなと感じたところです。

【伊藤会長】 そうですね。ありがとうございます。最後、内藤先生から、これを組み合わせるといいことで、今、酒井委員もお悩みのことがある程度応えられるようになるのではないかと考えています。ですから、部長、これをもう一回、僕のいなかった、これまでの基本構想の委員会のご議論とつなげる形で。

【白井企画広報部長】 すみません。基本構想での御議論は、ちょうど左側の2つだけです。コンセプトと導入すべき機能、このところだけが前回のものを引きずってきているということです。

【伊藤会長】 これをネットワーク、組み合わせていけば、面白いと思うんですよね。

【白井企画広報部長】 はい、分かりました。

【伊藤会長】 この委員会は、あと2回ぐらいですか。1回ですか。

【白井企画広報部長】 今年度もまた3月にお願いをしまして、また来年度、今度は運営方法とか、そのようなものまで、また来年の夏ぐらいのところをお願いをしていきたいと思ひます。

【伊藤会長】 今日は意図的に僕、とんがった話ばかりしてしまつて恐縮でしたが、一度これをやっておかないと、何となくタブーの発言になってしまうんですが、ビューロクラティックなコンプロマイゼーション——英語で言った方が良ひと思うんですよね。コンプロマイゼーションで報告ができてしまうという、I am anxiousということがあったもので、今日は意図的にとんがった議論をさせてもらひました。恐縮でした。

それでは、今日はこれぐらいでよろしゅうござひますか。副知事、何か今日の感想を言つてください。

【難波副知事】 今日活発な議論をありがとうございました。大分ばらばらなように見えて、物すごく整理できたのではないかなと思っています。

先ほどコンセプトと機能というのがありましたが、多分今まで議論できていなかったのはマーケティングのところだと思うんです。どういう人を対象に、どんなものを入れていくのかというよりも、誰をターゲットとするのかというターゲティングのところあまりできていなかったの、それについても、今日はいただきましたし、それから当然、集客を考えてくると、マーケティングとしてやっていかないといけないので、どのくらい集客が出るかとか、そういうことも考えていかないといけないと思っています。それをやっていくと、今日、機能についてお話がありましたから、機能さえ決まっていれば、今のような整理をすれば、大体どんなものになるかというのは決まってくるのではないかなと思います。空間そのものが文化力のようなお話をいただいていますから、それはそれでしっかりとやっていくので、その辺りを整理すれば、相当まとまるのではないかなと期待をしています。本当にありがとうございました。

中でもしっかりと議論をして、また会長ともよく御相談させていただいて、次にまた提案をさせていただきたいと思います。本当に今日はありがとうございました。

【伊藤会長】 色々とお粗末でございました。

【白井企画広報部長】 それでは、本日は長時間にわたる熱心な御討議をいただきまして、誠にありがとうございました。

以上をもちまして、第2回東静岡駅南口県有地への「文化力の拠点」基本計画策定専門家会議を終了いたします。ありがとうございました。

— 了 —